

い。本港も北門港と同じく、沿岸一帯の産鹽を安平に搬出する爲に出入する船舶に依つて辛ふじて港灣の命脈を保たれて居る。

九 梧棲港 (臺中州大甲郡)

本港は大甲溪口及大肚溪口の間中に位し、沿岸一帯は茫漠たる淺洲であるが、二、三埤圳の合流に依つて形成された細長き凹地に船を入れることが出来る。今から百四十餘年前隣接部落民が現在の宇魚寮に移住し來つて、漁業に従事したのが開拓の初めであるが、其の後移住者は次第に増加し商業を營むと共に、凡ての物資は竹筏に依つて鹿港と交易を開始するに至つた。當時は今の街を距ること北西方約二百十八米、埤圳水の流合する箇所第一大深凹地があつて、船舶は自由に碇泊が出来た。而して對岸獺堀から戎克船が來港して貿易を始める様になつて以來は、厦門、福州、汕頭等から貿易船が頻繁に往來して殷盛を極めたが、明治二十年頃から流砂、飛砂のため港口埋没して戎克船の出入さへ困難となつた。其の後幾何もなく、其の西方數町の處に塗葛堀の港を發見して、梧棲の商人は該地に倉庫を設置し、出張所を設けて、戎克船貿易に従事したので、五十噸以上の船舶は塗葛堀港に、その以下の小型船は梧棲港に出入すること

となつた。然し商取引は依然梧棲港に於て行はれて居た。然るに明治四十四五年の頃數回に亘る大洪水のために塗葛堀港は埋没して船舶の出入は不能となり、戎克貿易は梧棲のみで行はれる様になつた。領臺後明治三十年一月特別輸出入港に指定されて一時は支那型船の出入が頻繁であつたが、近時對岸との貿易が次第に衰微するので、昭和七年十二月特別輸出入港の指定を解かるゝに至つた。

現在の錨地は税關監視署を去る二軒餘の地點で、貨物は大形の竹筏を以て運搬してゐる。大肚溪の流勢は海岸の淺洲を貫流して濬筋を形成するので、最近迄獺堀船と稱へ陶器専門の貿易船は、高潮時に此の濬筋を溯つて投錨して居た。満潮時は水深二米内外となるが、干潮時には船底を露出する迄減水するので、牛車は船側に至つて容易に荷揚をなすことが出来る。此處から縦貫鐵道線までは僅かに三軒餘で、此の間輕便鐵道並自動車の便がある。貿易の狀況は左の通りである。

(一) 各年梧棲港貿易價額 (沿岸貿易を除く)

年次區別	輸出		輸入		合計
	輸出	移出	輸入	移入	
明治二十九年	75,143		36,226		111,369
同三十一年	1,013,001		51,003		1,064,004
同三十二年	604,969		39,839		644,808
同三十三年	1,093,785		39,697		1,133,482
同三十四年	544,333		25,420		569,753
同三十五年	1,142,554		28,188		1,170,742
同三十六年	469,294		25,779		495,073
同三十七年	305,980		23,653		329,633
同三十八年	322,278		18,166		340,444
同三十九年	140,879		16,576		157,455
同四十年	72,058		12,593		84,651
同四十一年	114,764		13,495		128,259
同四十二年	62,109		13,276		75,385
同四十三年	35,886		16,127		52,013
同四十四年	44,321		19,446		63,767
同四十五年	53,821		21,033		74,854

年次區別	輸出		輸入		合計
	輸出	移出	輸入	移入	
和元	5,635		14,123		19,758
同十一年	5,830		9,850		15,680
同十二年	50,924		7,426		58,350
同十三年	62,055		9,854		71,909
同十四年	100,888		9,447		110,335
同十五年	9,592		10,888		20,480
同十六年	17,012		8,895		25,907
同十七年	25,508		11,450		36,958
同十八年	30,555		13,702		44,257
同十九年	49,953		15,881		65,834
同二十年	17,960		13,143		31,103
同二十一年	33,892		34,750		68,642
同二十二年	50,545		50,503		101,048
同二十三年	23,810		41,016		64,826
同二十四年	5,651		18,943		24,594
同二十五年	37,405		50,068		87,473
同二十六年	19,400		61,192		80,592
同二十七年	3,100		37,631		40,731
同二十八年	19,384		25,943		45,327
同二十九年	8,110		26,040		34,150

(二) 各年梧棲港貿易數量 (沿岸貿易を除く)

年次區別	輸出		輸入		合計
	噸	噸	噸	噸	
大正元年	六	六	一二八	一二八	一二八
同 二年	三	三	七四七	七四七	七九〇
同 三年	三	三	七九三	七九三	八八五
同 四年	一四七	一四七	一五〇一	一五〇一	二九七八
同 五年	二四八	二四八	一五六三	一五六三	三九一一
同 六年	七五七	七五七	一四三〇	一四三〇	二一八七
同 七年	三三九	三三九	一四九一	一四九一	一八三〇
同 八年	一三八	一三八	七六七	七六七	九〇五
同 九年	六	六	一七〇一	一七〇一	一八〇七
同 十年	一七六	一七六	二一七二	二一七二	二九四八
同 十一年	五九五	五九五	一一八	一一八	一三二九
同 十二年	二〇一	二〇一	一八二	一八二	一三二九
同 十三年	四六	四六	五八一	五八一	九九七
同 十四年	六〇九	六〇九	六六五	六六五	一三七四
昭和元年	三二〇	三二〇	七〇〇	七〇〇	一〇二〇

(三) 各年梧棲港入港船舶 (沿岸船を除く)

年次區別	汽船	帆船	其他	合計
	隻	隻	隻	隻
同 二年	二四	二四	三三	三三
同 三年	三五	三五	七四	七四
同 四年	三〇八	三〇八	一〇二九	一〇二九
同 五年	五八	五八	一〇四三	一〇四三
同 六年	二七	二七	四五〇	四五〇
同 七年	五	五	一一三	一一三
同 八年	三	三	一	一
同 九年	三	三	一	一
同 十年	三	三	一	一
同 十一年	三	三	一	一
同 十二年	三	三	一	一
同 十三年	三	三	一	一
同 十四年	三	三	一	一
同 十五年	三	三	一	一
同 十六年	三	三	一	一
同 十七年	三	三	一	一
同 十八年	三	三	一	一
同 十九年	三	三	一	一
同 二十年	三	三	一	一

年次區別	汽船	帆船	其他	合計
	隻	隻	隻	隻
同 二年	二四	二四	三三	三三
同 三年	三五	三五	七四	七四
同 四年	三〇八	三〇八	一〇二九	一〇二九
同 五年	五八	五八	一〇四三	一〇四三
同 六年	二七	二七	四五〇	四五〇
同 七年	五	五	一一三	一一三
同 八年	三	三	一	一
同 九年	三	三	一	一
同 十年	三	三	一	一
同 十一年	三	三	一	一
同 十二年	三	三	一	一
同 十三年	三	三	一	一
同 十四年	三	三	一	一
同 十五年	三	三	一	一
同 十六年	三	三	一	一
同 十七年	三	三	一	一
同 十八年	三	三	一	一
同 十九年	三	三	一	一
同 二十年	三	三	一	一

て、本港が新竹の近くにあつて其の輸入の門戸をなして居た關係から竹塹港と稱せられて居た。雍正元年（西曆一七二三年）清國は淡水廳を新竹に設置したが海防戒嚴のため此の地に巡檢司を置き、砲臺を築いて竹塹港の守備に備へた。降て雍正九年（西曆一七三一年）島内貿易港として開放せられ、乾隆年間には有志豪商によつて港内の浚渫が行はれたが嘉慶十八年（西曆一八一三年）大洪水のため港口は全く埋没して、一時船舶の出入を附近の竹塹新港に移したが後間もなく竹塹港跡を改浚して港となして以來本港を舊港と稱するに至つた。然し附近一帯には砂丘が連り、飛砂の堆積や洪水による流砂等のために次第に港内は埋没せられて船舶の出入に不便を感じる様になり、加ふるに領臺後島内に於ける交通機關の完備に伴つて、貨物の集散は俄かに減じて漸次衰微するに至つた。

本港は明治三十年一月特別輸出入港に指定せられ對岸福州、夏門、泉州、温州等との間に支那型船に依つて貿易が行はれて居たが、近年戎克船の入港が次第に減少するので、昭和七年十二月此の特別輸出入港の指定を解かれ、支那型船の直接入港は出来なくなつた。

港口は西北方に開き、港内の廣さは東西千四百五十四米南北二千百八十二米で水深は干潮時〇米七内外、満潮時五米内外である。港外一帯は遠淺である爲、小型漁船でも満潮時以外には入港が出来ない。本港と新竹市との間は輕便鐵道及自動車の便がある。

貿易の狀況は左の通りである。

(一) 各年舊港貿易價額 (沿岸貿易を除く)

年次區別	輸出		輸入		合計
	輸	移	輸	移	
明治二十九年	一三六、三五八	—	一七〇、一七七	—	三〇六、五三五
同 三十一年	一四六、九九三	—	二六二、三五九	—	四〇九、三五二
同 三十一年	一三六、四六四	—	三三九、一九〇	—	四七五、六五四
同 三十二年	九三、三二一	—	二二四、四九三	—	三〇六、八一四
同 三十三年	一〇八、六六〇	—	一三八、五九二	—	二四七、二五二
同 三十四年	九八、二〇九	—	一五二、七五一	—	二五〇、九六〇
同 三十五年	一七、一九七	—	一五〇、六九九	—	二七二、八九六
同 三十六年	一四七、三四四	—	一三〇、一三三	—	二七七、四七七
同 三十七年	一三〇、九六三	—	九七、三六六	—	二二八、三三〇
同 三十八年	一一〇、三四四	—	一一一、三六三	—	二二一、七〇七

年次區別	輸出		輸入		合計
	輸	移	輸	移	
大正元年	八〇二		二二二五		三〇二七
二年	九三三		三二〇五		四一三八
三年	一〇〇七		三一九九		四二〇六
四年	八五八		一五七二		二四三〇
五年	一〇八一		二〇四九		三〇六〇
六年	一六五〇		二五二九		四一七九
七年	一九五三		二六四四		四五九七
八年	一五〇七		二七七五		四二八二

(二) 各年舊港貿易數量 (沿岸貿易を除く)

同	九三二五		一〇一三七		一九三三七
同	一〇六六八		二九六四九		三六三一七
同	四七六五五		八六八四七		三四五一二
同	二七七一		五二四九		八〇一〇三
同	八〇二七五		五二九九二		一三三六七

年次區別	輸出		輸入		合計
	輸	移	輸	移	
昭和二年	六六三八		七七一〇		一四三三八
三年	一七七八九		一五四七三		三三三六二
四年	一三七九五		一七八五		三六二〇
五年	一四二一五		一〇〇〇一		二五二一五
六年	一五四六五		二〇八八九		三六三五四
七年	二〇四四八		二四二二		二二八七〇
八年	二四七八五七		二九二六〇		五四〇四五七
九年	二八九六六六		三三九九五		六二九六二一
十年	一九九七二		一七二八二		三七二五四
十一年	一五八二五三		一〇二一六六		二六〇四一九
十二年	八二七五一		六三八四〇		一四五一六一
十三年	八八一九二		七五三六六		一六三五六八
十四年	一四九七八一		一七〇五〇		三二〇二八三
十五年	一八六六一		一七七八五		三六四五六六
十六年	一四七〇六		一四七二五		二九四三二
十七年	一三八九一		一四〇五九		二七九五〇
十八年	五三二三六		六六四三五		一一九五六二
十九年	五七二六五		五七六七七		一一四〇三三
二十年	六〇三三三		七八七三六		一三九〇四九
二十一年	一三二八七		七八七三六		一九一六〇三
二十二年	二二〇一一		一五三〇八		三七三〇九

昭和十年九月十二日印刷
昭和十年九月十五日發行

臺灣總督府交通局道路港灣課

臺北市上奎府町二ノ二六
印刷人 吉村清三郎

臺北市上奎府町二ノ二六
印刷所 吉村商會印刷部

民國十一年六月二十二日

孫傳芳將軍

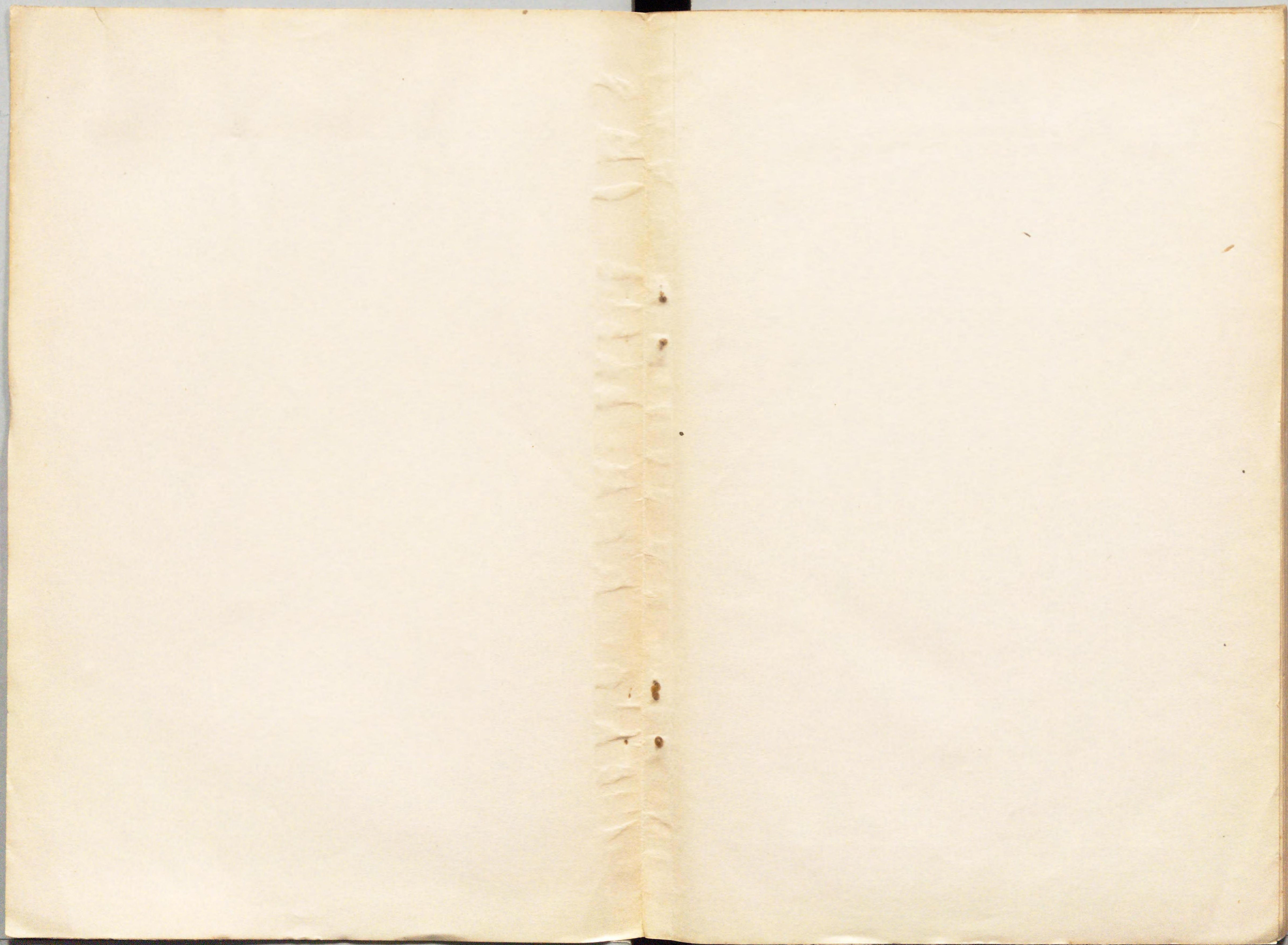
福建福州

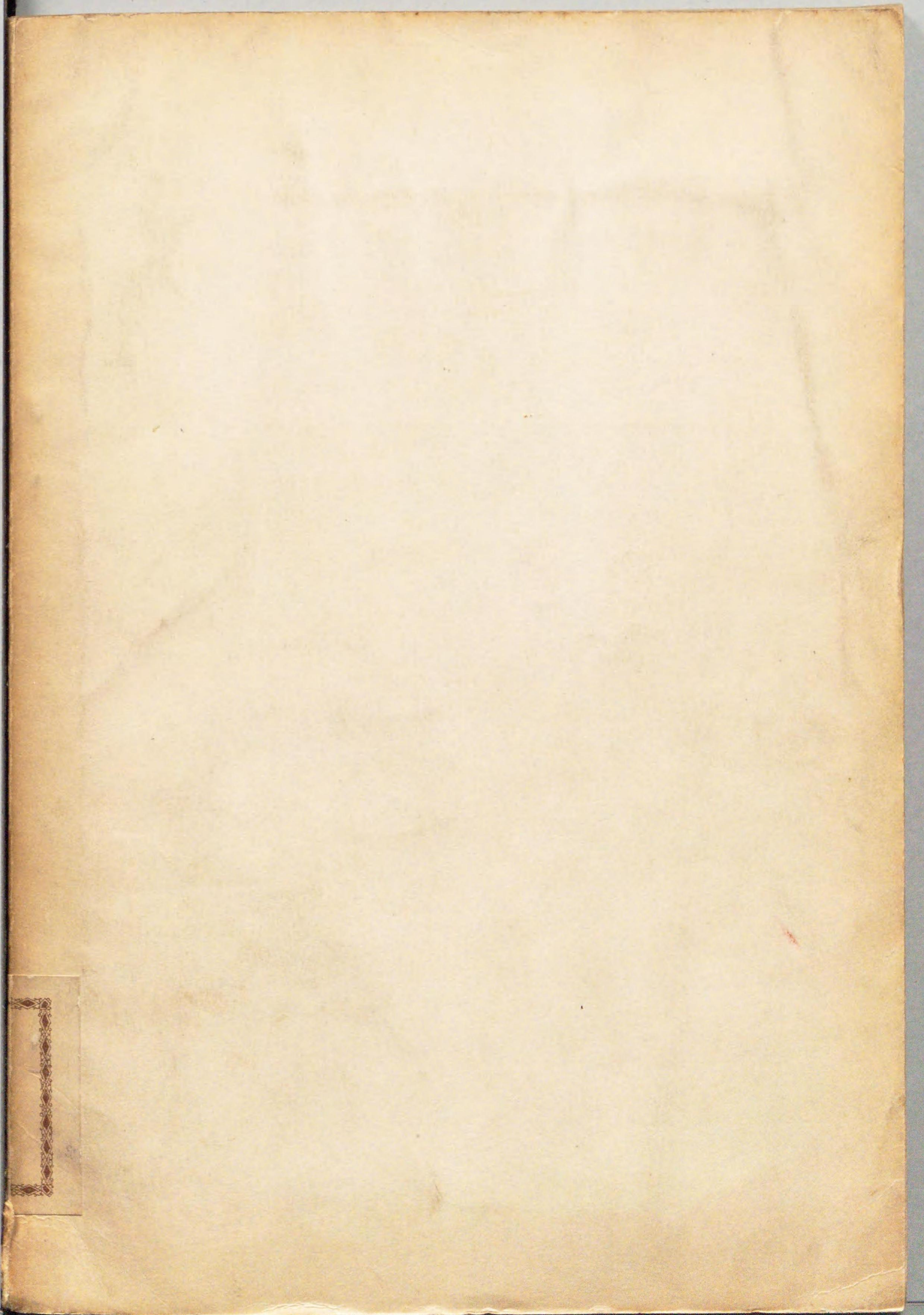
收

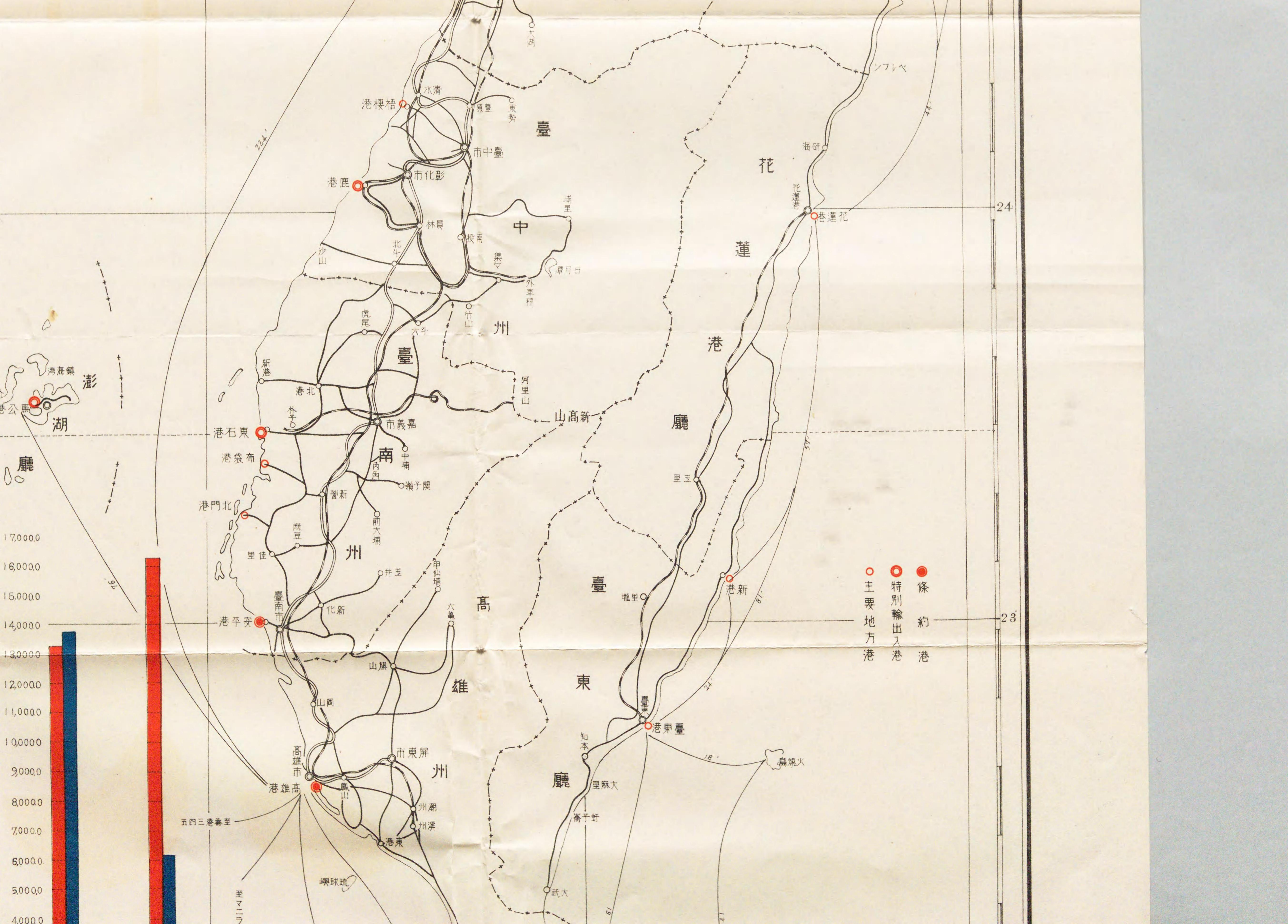
福建福州

收

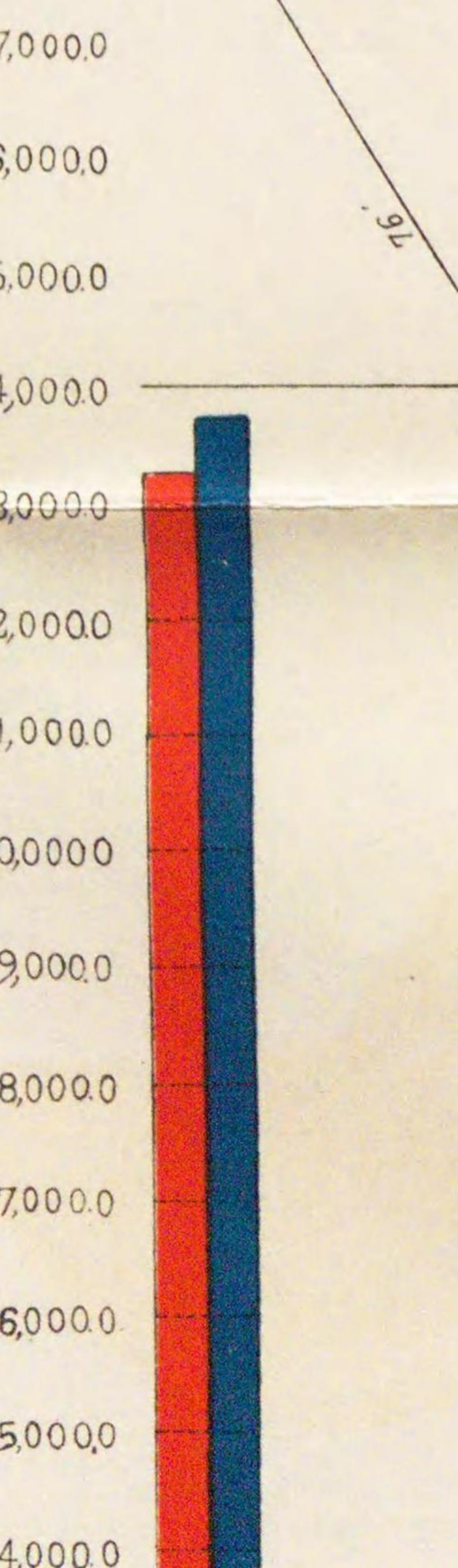
福建福州







- 主要地方港
- ◐ 特別輸出入港
- ◑ 條約港



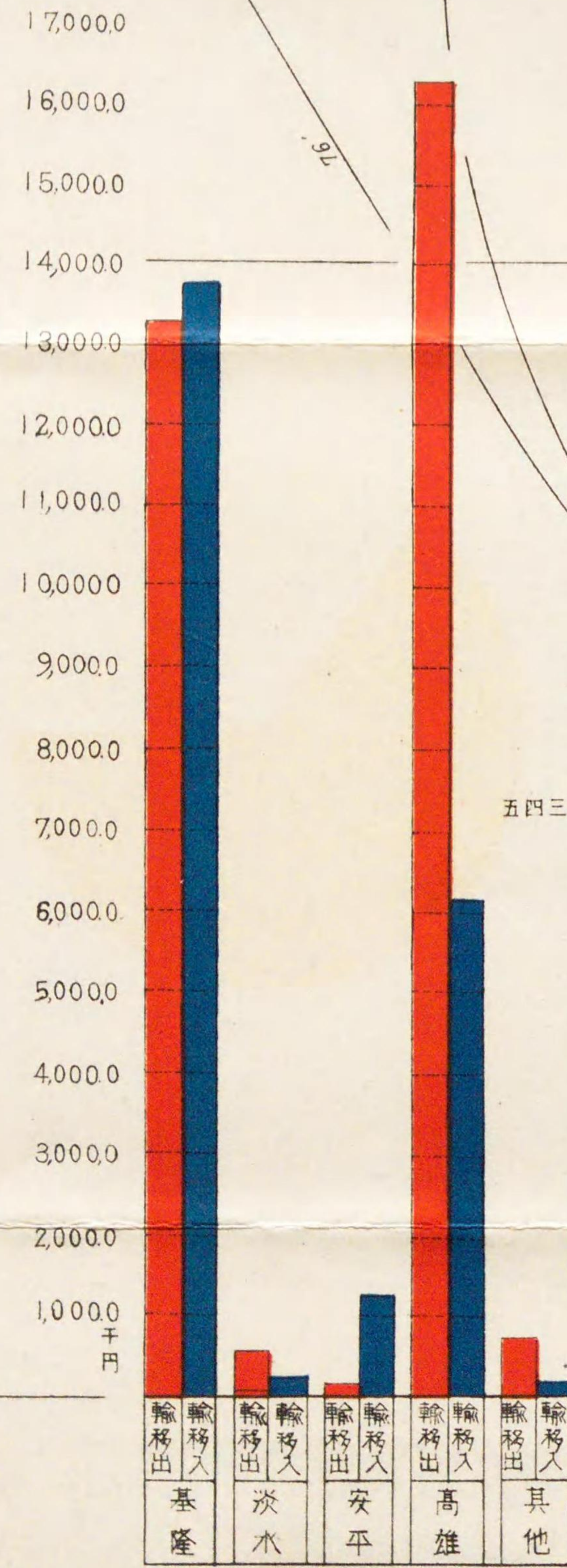
五門三港春至

至マニラ

嶼球琉

島燒火

昭和九年臺灣各港貿易額比較表



1200800675135